

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第28号

令和6年4月30日発行



ごあいさつ

同窓会前副会長 藤田 佐和



池キャンパスの周辺は桜満開で、春の到来を感じております。同窓会の皆様におかれましては、コロナウイルス感染症が5類になって最初の春をどのようにお過ごしでしょうか。コロナ禍で培われた力を発揮されてそれぞれのお立場で新たな課題に取り組まれていると思います。一方、能登半島地震で被災され今なお先の見えない避難生活を送られている同窓生に心よりお見舞い申し上げます。また、看護職や様々なお立場で支援活動に携わっている同窓生の皆様に敬意と感謝の気持ちをお伝えいたします。

3月19日、5年ぶりにコロナ禍前のように保護者の方々やご来賓の皆様のご臨席のもと、卒業式・学位授与式が行われました。看護学部70期生79名、大学院看護学研究科博士前期課程13名、博士後期課程3名が晴れやかに、高い志をもって社会に飛び立っていきました。同窓会の皆様の学生生活支援、経済的支援、就職支援、そして何より卒業までの4年間、コロナ禍の厳しい状況の中、多くの施設で学生を受け入れていただき、学生が看護実践能力・研究能力を身につけ卒業できたことに心より感謝申し上げます。卒業時の満足度調査では、「本学学生として誇りをもてる」の評価が高く、同窓会としても嬉しく思っています。同窓会からは記念として、高知県立大学看護学部同窓会のネームと校章の入ったパワー蓄電ハンディライトを贈らせていただきました。卒業生、修了生の災害への備えとしてお役に立てればと願いを込めています。2024年3月現在、看護学部の卒業生は2,415名、看護学専攻博士前期課程(修士課程含む)修了生は342名、博士後期課程(健康生活科学研究科含む)修了生は70名、共同災害看護学専攻博士課程(DNGL)は7名となり、看護学部同窓会会員は、2,834名になりましたことをご報告いたします。

3月末で中野綾美先生が定年退職を迎えられました。中野綾美先生は高知女子大学家政学部看護学科の時代から今日まで37年間、大学・看護学部・看護学研究科の充実・発展にご尽力くださいました。4月からは特任教授として看護学研究科にお力添えくださいます。長年のご功績に敬意を表しますとともに心より感謝申し上げます。

新年度を迎え、大川宣容先生が新学部長に就任され、入学式では看護学部82名、看護学研究科16名の新たな同窓生を迎えました。これからも私たち一人ひとりが豊かで深いつながりのある同窓会ネットワークを拡充していくことを願っています。



- ① 同窓会前副会長ごあいさつ
- ② 教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ
- ③ お世話になった先輩からのメッセージ
- ④ ようこそ先輩！
- ⑤ 同窓会による学生・卒業生活動支援

- ⑥ 幅広い領域で活躍する修了生
- ⑦ フレッシュに活躍する卒業生
- ⑧ 看護学部は今
- ⑨ 温故知新



教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ

高知県立大学看護学部同窓会の皆様へ

池田 光徳先生



今年で定年を迎え、長かった教育・研究の生活をひとまず終えることになりました。香川県の病院で2年弱働いた以外は、高等学校を卒業してから今までずっと、大学で学び、教え、研究してまいりました。本学では大学生生活の最後の15年間をお世話になったことになります。去り行く老兵（ロートル）から同窓会の皆様いくつかのメッセージをお伝えしたいと思います。高知県立大学看護学部が、日本で最初に看護の大学教育を始めた地であることは、皆様には「常識」でしょう。したがって、多くの看護師、多くの保健師、助産師、養護教諭や看護大学教員を輩出し、本学看護学部は日本の看護界にとってなくてはならない存在でした。同窓生の就職やこれまでの活動には絶対的に有利だったと思います。しかし、その「常識」は崩れつつあります。看護系大学の数については、2000年度に274大学、289課程が存在しており、大学数は飽和状態です。今後は若い看護系教員も引く手数多ではなく、次第に就職口を失っていくでしょう。看護学科入学定員は2019年度以降減少にありますが、ほとんどの

看護師希望者は大学教育を受けています。卒業生は、旧帝大や旧六医大であった大学の看護学科卒業生に太刀打ちできる実力を持たなければなくなっています。ちなみに「日本で最も有名な看護学部はどこか？」とBing AIに尋ねますと、日本赤十字看護大学、東京医科歯科大学、大阪市立大学、慶應義塾大学、東京慈恵会医科大学と答えが返ってきました。「常識」が過去の栄光にならないように、同窓会の皆様一人おひとりのご努力をお願いいたします。

「正解のない時代」という言葉が流行っています。本当に正解はないのでしょうか？ 私はそうは思いません。確かに「人はなぜ生きるのか？」というような根源的な疑問にはそうやすやすと正解は出てきません。この疑問には、哲学や倫理学や生物学が答えを与えてくれます。そのために、大学には一般教養科目が準備されているのです。学部生の同窓会の皆様にはアルバイトに明け暮れるのではなく、青春の特権である、読書、思索、議論に時間を費やすことをお願いいたします。

「すぐに役に立つ知識」を持つ人材を（おそらく経済界を中心に）世の中は求めているといわれます。実は「すぐに役に立つ知識」ならば既にマニュアルに書いてあり、一日もあれば身につきます。それよりも汎用性のある「基本的な知識」の方が仕事に役に立つのです。どうか看護師人生をかけて知識の吸収と知識の統合に励んでください。

本学卒業生の何人かが毎年大学院生として大学に戻ってきます。院生たちは異口同音に、自分には「知識がない」と言います。私は知識を身につける努力をしなかったのだと言いたくなります。「考えることが重要で、知識は二の次だ」という間違った考え方に洗脳されて、学部生時代に一つひとつの「基本的な知識」を身につけることをやってこなかったのだと思います。例えば疾患に対する「基本的な知識」は、その疾患の定義（概念）、疫学、病態生理、検査所見、治療法など、その疾患の患者さんに関わる共通項目です。他の科目も同様です。「用語」を自分の言葉できちんと説明できることが肝要です。看護は個別性の学問だということを聞きますが、共通項を知らずして、個別性は理解できないというのは自明の理です。知識なしに、議論することも考えを深めることも不可能です。学部生には議論の方法を学ぶよりも、議論の対象になるネタ（知識）を身につけて戴きたいと思います。看護学nursing scienceと看護nursing (practice) の区別も大切だと思います。

同窓生の皆様にも、本学看護学部の状況とその対応を共有して戴きたく、筆をとりました。

そして、15年間大変お世話になりました。

（本稿後半の要旨は、学部広報誌FureFureに掲載したものと重複することを、ご理解願います。）



2024年3月26日（火）

池田光徳教授 最終講義「私の健康研究」

お世話になった先輩からのメッセージ

角谷 広子さん(25期生 修士5期生)



私は昭和50年4月に高知女子大学家政学部衛生看護学科に入学した25期生です。卒業後から今日に至るまで医療法人おくら会がいせいで勤務し、途中、双子出産のため3年間退職し、約2年間非常勤でしたが、正職員としては通算42年間同じ職場で勤務していました。

大学を卒業した当時は、同級生の多くは県外に就職したので、休日は時々喫茶店で友達に近況報告の手紙を書いていたことを思い出します。看護師としては未熟でしたが、月に1回、精神科の領域で仕事をしていた女子大の先輩、後輩が永国寺キャンパスに集まって勉強会を開催してくださり、テーマを決めてディスカッションしたり、ケース検討会したり、雑誌に投稿したりする機会をいただいたことが、卒業後も私がポジティブな気持ちで看護師を続けられた要因の一つだと感謝しています。

それから23年後、娘たちが高校へ進学と同時に高知市内に引っ越してきたことをきっかけに、大学院に進学することにしました。クラスメートの中で最年長の私は、あまりにも知識が古くなっており、頭の中をはたきではたきながら学んだことでした。仕事をしながらの通学でしたので、いつ休息し、いつ資料を集め、徹夜するのかを考えながらの2年間でした。指導していただいている内容を理解できず、随分サポートをしていただいたことも思い出されます。それでも、仕事とは別の世界があるということは、ワクワクウキウキする気持ちが強く、仕事帰りは必ず大学に足を運んでいました。そして、世代が異なり、価値観も異なる友人に巡りあえて、自分自身が驚くほど行動的な人間に生まれ変わったように思います。

その後は、日本精神科看護技術協会(現在、日本精神科看護協会)高知県支部の教育委員長、支部長の立場で研修や専門学会を開催したり会議に参加したり、日本看護協会の認定看護管理者を取得して、高知県看護協会の役員や研修の講師をさせていただいております。

医療法人おくら会がいせいでは、芸西病院、介護老人保健施設リゾートヒルやわらぎ、訪問看護ステーションがいせい、認知症グループホームがいせいの人事の統括の立場で看護部長を21年従事していました。常時数人の先輩、後輩と一緒に仕事を行い、また、県立大学看護学部の先生方には、ケース検討会のアドバイザーに来ていただき、学部生の在宅看護実習や老人看護領域、精神看護領域の大学院の学生の皆様にも実習の場としてご活用いただき、今日に至っています。

この間、高知県立大学看護学部同窓会の役員もさせていただきました。皆様と一緒に得月楼でしばてん踊りを踊ったり、北本町のジャズ喫茶アルテックでシャンソンのタベを楽しんだり、ラ・ヴィータでは親子のマリンバ演奏家の心地よい音色に耳を傾けたり、濱長ではお座敷芸を見聞したり、永国寺の新しいキャンパスの食堂で大学生のお琴の演奏を聴いたりしたことでした。

大学を卒業して45年間、時の経つのも忘れて、気が付くと浦島太郎のおばあさんです。(笑) そろそろ私は、孫やらの時間をゆったりと楽しむことにしたいと思っています。私の人生を豊かにしていただいた母校の先生方、皆様、どうもありがとうございました。

そして、僭越ではございますが、県立大学看護学部卒業生の皆様、どうか卒業後も母校と何らかの繋がりを持ち続けてご自身の研鑽の場として、あるいは同窓会を通して同級生や、先輩、後輩との交流を続けていただければと思います。それがひいては、母校の発展に寄与することに繋がると信じ、一同窓生として心より願っております。



ようこそ先輩！

岡谷 恵子先生(19期生)



私は1973年に母校を卒業し、2023年3月末で退職しました。この50年を振り返るとさまざまな思いが去来します。50年のうち仕事をしていたのは約40年ですが、この私のキャリアの中で最も長く続いたのは母校の非常勤講師です。学部で17年、大学院で19年、看護政策に関する講義を担当しました。母校からの仕事の依頼は断らないという信条を貫いた結果の長さです。

学生時代の講義のほとんどは忘れてしまっているのですが、今でも鮮明に覚えている授業の一つが小林富美栄先生の看護制度・政策に関する講義です。先生は当時日本看護協会長になられたばかりで、言葉一つ一つに看護への情熱が込められているように感じました。看護は専門職としての地位を確立しなければならないと熱く語られ、中でも私の記憶に残っているのは准看護師制度についての話でした。先生は当時准看護師の就業者数が看護師を上回っている現状から、「准看護師制度は廃止しなければならないが今はその時期ではない。圧倒的に数の多い准看護師を看護師に移行させれば看護の質はどうなるのか」と力説されていました。私はそれまで看護制度について深く考えたことがありませんでしたので、先生の講義を通して、日本の看護の質や専門職としてのあり様は制度によって大きく左右されることを学びました。それから20数年後に公益社団法人日本看護協会に就職し、初めて担当した政策課題が准看護師制度でした。准看護師制度を担当したことは偶然ですが、日本看護協会への就職は大学の時に受けた小林先生の講義が導いてくれたものでした。看護実践の場で一人一人の看護職が日々研鑽し、持てる力を発揮して看護を提供していくことはとても大切ですが、来るべき社会の大きな変化の中で誠実に確実に看護を実践していこうとする看護職はもちろん看護を必要としているすべての人々のために、看護制度・政策に関心を向け、制度の変革創造に取り組んでみよと思う学生が一人でも多く出てくることを願いつつ講義をしてきました。今、さまざまな場で看護を実践している同窓生の皆さんの中には、現在の看護のあり方や看護制度・政策について疑問や不安を感じている方は多いのではないのでしょうか。看護の本質を具現化できているのか自問自答している人もいるのではないのでしょうか。制度を変えていくことは容易なことではありません。しかし、日本で初めて大学での看護教育を開始した母校の72年という厳然たる歴史を誇りに国、地方自治体、職能団体などで制度変革活動にチャレンジしてみよと思う人が出てくることを心から願っています。

今後の私の目標は、8回というホノルルマラソンの参加回数をどこまで伸ばせるかということです。時間ができたので、今までできなかった練習をしっかりとやっていこうと思います。年代別の優勝も夢ではないかもしれません。



人生とキャリアの節目を迎えて

多田 邦子さん(32期生、修士5期生、博士9期生)



高知女子大学を卒業して38年が過ぎました。その間、母校においては、定員20名の看護学科から定員80名の看護学部へ、男女共学の高知県立大学へと、めざましく発展を遂げ、年号は昭和・平成・令和と変わってきたことを思うと隔世の感は否めません。

私は大学卒業後、高知医科大学(現・高知大学)医学部附属病院で新人看護師(当時は看護婦)として働き始めました。希望の内科病棟に配属され、多忙ながらも楽しく勤務しました。入居した宿舎は、洗濯場・浴室・トイレが共同、他の病院の寮に入居した同級生には、居室に個人の電話を

置けることを羨ましがられるような時代でした。その後、複数の病棟で勤務するうちに、徐々に管理的な役割を担うようになり、看護管理を意識するようになりました。看護単位をあずかる看護師長のマネジメントはどうあるべきか、という問いを抱いて、16年間勤務した病院を退職して高知女子大学大学院へ進学しました。

修士課程修了後は、古巣の高知大学医学部附属病院に戻り、初代の教育担当看護師長となりました。当時、全国的に活用が広がっていた「クリニカルラダー」を現行教育体制に導入し、段階別研修の充実に力を入れていました。その後、副看護部長職を担う中で、円滑な看護管理を実践するための能力として“対人関係能力”に関心をもち、再々度、高知女子大学大学院博士課程に進学しました。病院の看護部組織において、看護師長のマネジメントが運営の要である、という思いは看護部長の職務を経験した現在でも変わっていません。その意味では、県下の看護管理者を育成する、高知県看護協会主催の認定看護管理者教育課程に長年携わってこられたことは光栄なことでした。

私はこのたび3月で看護部長職を終え、高知大学医学部看護学科に異動することになりました。今年還暦を迎え、生まれも育ちも学校も職場も高知、という私にとって、これまで多くのひととのつながりに支えられてきたことを実感する日々です。これまで病院勤務や学生生活で先生方・諸先輩方のご指導・ご支援を頂き大変お世話になりました。今後ともどうぞよろしく御願いたします。

同窓会による学生・卒業生活動支援

第30回日本家族看護学会学術集会 学術集会長 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
小児・家族看護学教室 教授
山崎 あけみ（高知女子大学 家政学部 看護学科 32期生）

日本家族看護学会第30回学術集会を大阪大学吹田キャンパスにおいて、2023年9月9－10日に開催致しました。会期中には、1,189名ご登録頂きました。多くの同窓生の皆様にご支援頂きましたこと心から御礼申し上げます。

私のDyadic Approach/もうひとつのいえづくり というテーマの会長講演では 野嶋佐由美先生に、メインシンポジウムのひとつ、もうひとつのいえづくりから見えてくる家族看護のいま、では長戸和子先生に座長をお引き受け頂きました。さらに、濱田裕子先生（博士後期課程2期生）が、第29回学術集会長でしたため、その企画運営会議にオブザーバとして参加をお許しいただけたこと、第30回の会期が近づいてからもいつどのような些細なことを質問しても丁寧に教えてくださったこと、同窓会のつながりにより守られました。

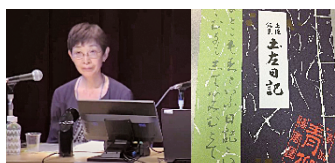
大阪での開催ですので、第1日目の特別講演には、大阪大学人間科学研究科 村上靖彦先生にこどもたちがつくるまち・西成をご講演頂き、その日の夕方、西成にあるこどもの里を題材にしたドキュメンタリー映画、さとにきたらええやんの上映会を行いました。多彩なオンデマンド講演も充実させました。一般演題102演題（口演46、ポスター56）、交流集会19セッション、委員会企画9セッションでした。なかでも、高知県立大の先生方や同窓生の方の運営する交流集会はどこも満席で、ご不便をおかけしたこと この場をかりてお詫びいたします。



会長講演 Dyadic Approach/もうひとつのいえづくり 山崎あけみ
特別講演 こどもたちがつくるまち・西成 村上靖彦
教育講演 家族療法から学ぶかわりのコソ 東豊 遺伝と家族 酒井規夫
30周年記念シンポジウム 鈴木和子・石垣和子・上別府圭子
シンポジウム1. 家族内の関係性をめぐる研究方法を探る
植木慎悟・山本弘江・佐藤伊織・Edward KL Chan
シンポジウム2. もうひとつのいえづくりから見えてくる家族看護のいま
中山祐一・林信平・江口八千代
共催・コラボ企業 サノフィ株式会社・武田薬品工業株式会社・株式会社公益社・
コロプラ株式会社・株式会社メディカ出版

国際的/学際的なオンデマンド講義

フィンランド発！対話型家族支援法Let's Talk about children Tytti Solantaus
さまざまな場で家族を測定する What measurement do we need? Kathleen J Sawin
全国家族調査(NFRJ)からみた日本の家族 田淵六郎
家族法 親子関係に焦点をあてて 床谷文雄
文化を越境する家族看護－新生児NPの視点から エクランド源雅子
市民公開講座 家で幸せに生きるための最高のケアとは 藤野泰平



中野綾美先生から
頂いた差し入れ



幅広い領域で活躍する修了生

藤井 愛海さん(学部56期生 DNGL1期生) 日本赤十字豊田看護大学

私は、56期生として学部を卒業した後、高知医療センターでの勤務を経て、2019年に5年一貫性博士課程・共同災害看護学専攻(DNGL)の1期生として修了しました。現在は、日本赤十字豊田看護大学にて災害看護学領域の教員として勤めながら、3歳になる子供と慌ただしくも賑やかな日々を送っています。

学部時代は友人や先輩・先生方に助けていただき何とか卒業した決して優等生とは言えなかった私が、臨床の中で学びの楽しさに目覚め、大学院の門を叩いたことは人生の大きなターニングポイントでした。災害看護に関する多くの知識を得ることができたとともに、沢山の研究プロジェクトやフィールドワークを友人や先生方と経験することができた、とても充実したかけがえのない時間でした。

DNGL修了後は現在の職場に入職し、教育・研究活動に奔走する日々でしたが、少し慣れてきた頃にCovid-19が流行しました。その中で私は初めての妊娠をしたのですが、災害看護の専門家として地域支援に積極的に参画したい気持ちとは裏腹に体調の変化から思うように動くことができず、申し訳なさや悔しさを抱えていました。また、産後は夫の仕事の都合によりイタリア・ボルツァーノで1年間生活をしたのですが、慣れない土地かつ日本人がほとんどいない環境で子育てをすることは想像以上に大変だったと振り返ります。一方で、その経験によって、異なる文化や価値観、人々のライフスタイルを知り、自分自身の家族や働き方、人生の送り方について見つめ直すことができた貴重な時間でもありました。



育休より復帰して1年が経ちました。もっと仕事がしたい気持ちと子供と関わりたい気持ちがせめぎ合う毎日です。その中で改めて再認識していることは、私にとって研究はとても楽しくやりがいを感じるのだということです。現在は主に災害関連死や災害時のケアニーズについてのテーマに取り組んでいます。DNGL時代に得たネットワークを基盤に、国内に限らず、また看護に限らず、多くの議論や新たな視点によって引き続き積み重ねていきたいと思っています。

写真は主指導教員であつた南裕子先生、在学中から現在に至るまで研究の機会やご指導を下さる神原咲子先生、そしてDNGL4期生のSushilaさんとChandraさん達と2024年3月末に再会したときのものです。

木村 義孝さん(修士23期生) 高知医療センター老人看護CNS



私は令和4年に大学院を修了し、老人看護専門看護師の資格を取得しました。元々は京都出身なのですが、高知県出身の妻の地元へ引っ越すことになり、高知医療センターに就職しました。京都の大学病院で手術室にいた経験から、高知医療センターでは心臓血管外科病棟に配属されました。手術の対象も年々高齢化が進み、認知症の患者さんが目に見えて増え出したのが5~6年前だったと思います。祖母が認知症だったこともあり、認知症の患者さんがどうすれば安心して入院生活を送れるのか、どうすればスムーズに治療を終え元々いた場所に帰ることができるのか、また身体拘束や意思決定など倫理的な課題に日々悩む毎日を過ごしていました。上司から大学院への進学を勧められたのはそんな頃です。

大学院では苦しくも刺激的な毎日を過ごさせていただきました。様々なことを学べるだけでなく、身体的な課題ばかりに注目している自分の看護観を振り返る機会にもなりました。老人看護領域の竹崎先生にたたきこまれたのは、とにかく「相手の立場から物事を見る」ということです。一見簡単そうに思えますが、突き詰めるとこれが非常に難しい。相手の立場、経験や背景を考慮してなぜそのように感じるのかを理解すること、どのような価値観や信念を持っていてどのように物事を見ているのかを考えると、相手の意見や視点が異なる場合でも柔軟に受け入れることなどを教わったように思います。年齢や臨床経験、専門分野の異なる仲間たちとのディスカッション、授業でのプレゼンテーション、病院実習、論文のクリティークや修士論文をまとめていく作業なども、今から思えばこの力を身につける訓練だったように感じます。

現在、私は高知医療センターの認知症ケアチーム、リエゾンチームに所属しています。まだまだ「相手の立場から物事を見る」という力は不十分ではありますが、認知症患者さんやせん妄患者さん、そのご家族へのケアはもちろんのこと、ラウンドやリンクナース会でのスタッフとの関わり、他職種との連携、チーム運営や組織全体への働きかけなど様々な所で意識するようにしています。さて、直近では院内デイケアの拡大、せん妄予防・改善のプロトコル作成、身体拘束最小化など様々な困難に直面しています。しかし、老人看護領域の検討会へ参加できたり、先生方や先輩方、他分野の専門看護師のアドバイスを受けることができるのは非常にありがたいです。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。私も恩返しができるように日々邁進して参ります。

フレッシュに活躍する卒業生

「看護師として働いて」

高知赤十字病院

下元 はづきさん(69期生)

入職して1年が経とうとしていますが、まだまだ慣れないことが多く、学ぶことの多い毎日です。大学で学んだ知識や技術が実践で役立つことは沢山ありますが、忙しい日々の中で1つ1つ振り返り、確認しながらできるかと言うとそうではないと感じることも沢山あります。そのような中でも自分が患者さんに対して自信を持って看護ができるようになるよう、自己学習を怠ってはいけなさと感じています。どれだけ自分が忙しくても患者さんから「ありがとう」と言ってもらえることでまた頑張ろうと思うことができ、患者さんに対する接し方も自分なりに考え、より良い看護に繋げていくことができるのではないかと考えています。私は1月に部署異動となり、受け持ち患者が増え、業務もより忙しくなり、戸惑うことも多くあります。また、4月からは後輩も入ってきます。頼れる先輩にはまだなれませんが、日々一緒に学びながらこれからも成長していきたいと思っています。



「養護教諭として働いて」

四万十町立米奥小学校・養護講師

濱田 りょうさん(69期生)

1年間養護講師として勤務させていただきました。小規模校ということもあり子どもたち一人一人とじっくりと関わることができる環境でしたので日々の心身の健康状態の変化を捉え、その子の強みを伸ばしていけるような関わりを意識しました。これは大学4年間で「対象となる人の状態をしっかりと把握し、その人の強みを生かしながらサポートする方法を考え実践し、更によりよい実践へと改善していく」ことを学べたことが、今の私の支えになっていると思います。



最初は全てのことが初めてで、分からないことだらけでしたが、いつも「先生」と声をかけてくれる元気な子どもたちや、教職員の方々の丁寧で温かいサポート、そして保護者の方や地域の方のおかげで、楽しく充実した日々を送ることができました。令和6年度からは養護教諭として、この1年間の経験を大切にしながら、子どもたちの心身の健康を守り学校生活をサポートしていけるように頑張っていきたいと思っています。

「助産師として働いて」

神戸市立医療センター西市民病院

数井 千晴さん(69期生)

高知県立大学を卒業し、1年が経とうとしています。私は助産師として主にお産の介助や、切迫流産の妊婦さん、産後のお母さん、赤ちゃんを対象に、健康でより良い家族生活を送れるよう、日々関わっています。慣れない業務に苦戦し、緊急な場面では手も足も出ず、自身の無力さを痛感することもありましたが、その一つ一つが貴重な経験で、自身の助産師としての成長に繋がっていると実感しています。また、母親教室や両親教室、妊婦健診での妊婦相談なども実施するようになり、様々な社会背景を抱える妊婦さんとの関わりはとても難しく、悩むことも沢山ありますが、先輩方と話し合いながら保健師さんとも連携をし、色々なことを学ばせて頂いています。妊娠期から分娩、産後まで長期的に関わり、母子とその家族の成長を側で感じられること、そして、命の誕生の場に携われることにとってもやりがいを感じています。まだまだ未熟ではありますが、心強い同期と共に尊敬できる先輩の背中を追いかけて、励んでいきたいと思っています。



「保健師として働いて」

高知市保健所 地域保健課 予防接種・感染症対策室

高坂 菜未さん(69期生)

入職して、1年が経ちました。この1年を振り返ると、ただただ目の前のことに必死で、1年とは思えない程濃く充実した時間を過ごすことができたと感じています。

私は、性感染症の検査事業の運営や相談対応、感染症対策のための研修会を実施したり、対象者の方の自宅訪問をしたりしています。

大学で学んだ概念などを実践の場で活用することは想像以上に難しく、慣れない事業の運営や個別・集団支援において悩むことも多々ありますが、その時には職場の先輩や上司、関係機関の方々に相談し、助言や協力を得ながら取り組むことで、新しい発見や学びがたくさんあります。また、日々、市民の方と関わる中で、不慣れな私にあたたかい言葉をかけてくださる方もおり、職場内だけでなく地域の中でもあたたかい人とのつながりを感じながら働くことができて嬉しいと思います。私は対象者の方、一人ひとりがその人らしく生きることを支えられる保健師になりたいと考えています。2年目になりましたが、何事にも一生懸命取り組んでいきたいと思っています。



看護学部は今

日本国際保健医療学会 第42回西日本地方会開催報告 大会長・木下 真里先生(看護学部教授)



2024年3月2日(土)にオーテピア高知図書館・永国寺キャンパス地域連携棟において表題の学会を開催しました。

1986年設立の同学会は、もともと、国際保健医療にかかわる実務家、研究者、学生による、自由で学際的な活動で定評がありますが、今回、開催のお話をいただいた時には、県外の方、本学関係者双方にとって、またとない機会と確信しました。しかし、いざお引き受けしたものの、学内に学会員はだれ一人見当たらず、看護学部の正規業務ではないために、協力者を見つけるのに大変苦労しました。興味をもってくださる先生方もおられましたが、本務でお忙しい中で気軽に協力をお願いするわけにもいかず、企画から、HP作成、演題募集、査読、助成金獲得まで、多くを実質ワンオペでやらざるを得ませんでした。

それでも、テーマを「グローバル・ショックに対応する地域レジリエンスの探究」と決め、AIを使った風変わりなポスター、個性豊かな演者の方々、大学の共催支援など、一つ一つ準備が整うにつれ、あとは、楽しみでしかなくなりました。「高知の課題は世界の課題」として、身近な課題が、世界中で起こっている課題とどのように関連しているのかを、どれだけ共感し、議論してもらえるか、寝ても覚めてもそればかり考えていました。

当日は朝からさまざまなトラブルに見舞われ、手伝ってくださった方々には大変なご迷惑をおかけしました。外注の運営管理システムに不具合が起こり、受付が大混乱しました。公開プログラム限定当日券をお持ちの方から他のサービスについてのクレームや、当日の受付はお待たせする場合があることを事前にお知らせしてあったはずの方からのクレームは、特に残念でした。

それでも、高知工科大学の敷田幹文教授とゼミ生チームが構築、操作してくれた、プロ顔負けのスムーズなオンラインが絶賛されましたし、小林潤代表理事(琉球大学)からは「『地方会不要論』が出ている中で、地方会開催の意味を示した」と、高く評価していただきました。学会終了後の懇親会は、帯屋町商店街のおきやくコタツ席で行いましたが、寒さに凍えながらも話はずみ、翌日も高知滞在を満喫した方からは「高知の学会は楽しすぎた」とお便りをいただき、本当によかったと思いました。

ご参加いただいた方々、お手伝いいただいた方々に心からお礼申し上げます。

写真右上:学会ポスター 右下:懇親会の様子



徳永 旭さん(70期生) UOK手話サークルの活動とこれから

UOK手話サークルは、2020年に看護学部を中心として“聴覚障がい者への理解拡大”や“手話のできる専門職者を増やす”ことを目的に活動を開始しました。活動開始当初は新型コロナウイルス感染症の影響により思うような活動はできませんでしたが、現在では看護学部だけでなく、社会福祉学部、健康栄養学部の学生へと広がり、サークル員は50名を超え、学内にとどまらず学外においても活動を展開することができるようになりました。

昨年度は「立志社中」の活動に参加し、映画「咲む」の上映会や講演会など地域の方々に対しても手話・聴覚障がい者に対する理解を深めようと活動してきました。看護学部同窓会からも助成金をいただき、映画の上映会や県外から講師を招くことができ、普段のサークル活動では得られない学びや発見をすることができました。ご支援いただきありがとうございました。

学内外に関わらず手話や聴覚障がい者に興味を持ってもらうことの難しさを痛感しながらも地道に活動を続け、昨年度は新聞に活動の様子を取り上げていただいたり、高知医療センター学術集会でこれまでの活動について発表させていただいたり、様々な形で本来の目的である理解拡大を行うことが徐々にできるようになってきました。また、新聞での広報等により、地域の方から直接メールで問い合わせをいただき、一緒に活動をするなど少しずつ地域ともつながり、開かれたサークル活動ができるようになってきていると感じています。

今後は、これまでの活動で得た人とのつながりを大切にしながら、学内にとどまらず、地域とより一層つながりを強め、自分たちにできることを考えながら活動を活発にしていきたいと考えています。その中で聴覚障がい者・手話への理解拡大という目的を達成するだけでなく、「立志社中」の活動の中で目的としていた「誰一人取り残さない街づくり」についても考え、活動していきます。



温故知新 その14

明解看護学双書シリーズ

山崎 智子監修

基礎看護学Ⅰ 野嶋佐由美編著

基礎看護学Ⅱ 山崎美恵子編著

金芳堂（1996）全8巻

（写真は基礎看護学Ⅰ・Ⅱです）



今回は金芳堂の《明解看護学双書》の【基礎看護学Ⅰ】を紹介します。これは【基礎看護学ⅠⅡ】【成人看護学】【老人看護学】【小児看護学】【精神看護学】【母性看護学】【地域看護学】全8巻からなる看護学の教科書で、「看護大学教育カリキュラムに基づき、看護専門職者に必要な知識を解説！」と謳っています。

全8巻の監修は山崎智子先生、【基礎看護学Ⅰ】の編著者は野嶋佐由美先生です。

このシリーズの刊行について、山崎智子先生の監修者序文では以下のように述べられています。

「昭和55年、小林富美栄先生のご指導の下に、高知女子大学卒業生の、いわゆる看護者のみの執筆によって、看護学重点シリーズ全7巻（温故知新その11をご参照下さい）を出版し、多くの読者、先輩諸姉に支えられ、今日を迎えていた。このまま絶版とし、終止符を打つのもためらわれ、今一度卒業生の手によって再構築し、出版しようとまとめられたのが平成4年のことであった。（中略）執筆者である卒業生の一人ひとりが、それぞれの場で多忙を極める時期と重なり、執筆の進みは必ずしも足並みが揃わず、いたずらに日時を費やしてきたが、ようやく出版の運びとなった」

ここでは、「基礎看護学」は、看護の学問的な礎となる知識体系を探究していくものであると同時に、科学的かつ熟練した技を確立していく領域であると定義されています。そして、「看護はサイエンスとしての看護とアートとしての看護の両側面を有している」とし、サイエンスとしての看護を【基礎看護学Ⅰ】で、アートとしての看護を【基礎看護学Ⅱ】で論じるとされています。

【基礎看護学Ⅰ】の第8章から第10章、第11章から第13章について野嶋佐由美先生はまえがきにおいて、「本シリーズでは、『人間』『健康』『生活』『環境』『看護』を中心的な概念として設定しています。これらの概念の中で『健康』『環境』『生活』についての基本的な考え方を第8章から第10章で紹介しました。第11章から第13章までは『人間』『家族』『地域』と分けて看護の対象を論じています。看護活動を展開するためには少なくともこれら3つの対象を十分理解し、それぞれに固有な看護活動を展開する必要があると考えています」と説明され、概念についての基本的な考え方を学習し、理解できるよう構成されています。具体的には、

第8章：看護における健康－原礼子先生（日本赤十字看護大学助教授）

第9章：看護における環境－原礼子先生（日本赤十字看護大学助教授）

第10章：生活と看護－近田敬子先生（兵庫県立看護大学教授）

第11章：看護の対象としての個人－松本女里先生（高知女子大学教授）

第12章：看護の対象としての家族－野嶋佐由美先生（高知女子大学教授）

第13章：看護の対象としての地域社会－松本女里先生（高知女子大学教授）

と高知女子大学看護学科卒業生が執筆されています。ご所属は、出版当時のものです。

実は、令和6年現在の看護学部1回生の必修科目には「健康と看護」「環境と看護」「生活と看護」「人間と看護」という科目があります。平成16年にこのシリーズの第2版がでたときに、既に1回生必修科目として存在していました。科目が先にあったのか、教科書が先にあったのかは不明ですが、脈々と続いている科目です。

『人間』『健康』『生活』『環境』『看護』を中心的な概念として、その考え方を系統立てて1回生のうちに学習し理解することは、その後の成長のなかで看護について考え、実践していく上でも重要であると思います。高知女子大学・高知県立大学看護学部では、看護学を「サイエンスとしての看護とアートとしての看護を統合して体系化させていこうとする学問」として捉え、アート（技術）としての看護だけでなくサイエンスとしての看護を1回生から学ぶことを大事にしていることを、改めて気づく機会になりました。

令和6年度 高知県立大学看護学部 4回生看護研究発表会



令和6年度 高知県立大学看護学研究科 博士前期課程修士論文発表会



令和6年2月29日看護学部4回生の看護研究発表会、3月2日には、看護学研究科博士前期課程の学位論文発表会が開催されました。それぞれの領域において、看護研究で探求してきた成果を発表されました。

お悔やみ

同窓会名誉会員 山崎智子先生を偲び、感謝を込めて

高知県立高知女子大学家政学部衛生看護学科の3期生であり、本学名誉教授として定年後も本学の教育、研究にご尽力くださいました山崎智子先生が、2024年4月6日享年96歳でご逝去されました。

4月9日に執り行われた告別式に、多くの卒業生も参列し、これまでお世話になった智子先生にそれぞれが最期の思いをお伝えしました。

同窓会の懇親会においても智子先生は必ずご出席くださり、平成30年の料亭濱長で行われた懇親会では、智子先生の米寿のお祝いを行いました。あの時の笑顔が今も目に浮かびます。

いつも心温かく、いつも傍で私たち同窓生を見守ってくださった智子先生に心から感謝申し上げるとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



ご寄付をいただいた方

西山純子様（33期生） 山田 薫様（26期生） 福岡恵美子様（5期生）
他匿名希望

上記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。（令和6年3月31日現在）

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。

寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

ホームページアドレス

高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部
Fax: 088-847-8750